

拝啓 今年も早や12月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、すすきの穂が光線に映え、落ち葉がきれいな模様を作っております。

今回は、小西芳之助先生の『ガラテヤ人への手紙講解説教』からの引用の第6回目で、今回のエンカウンターの4頁には、次のように書かれています。

「仏教、浄土門と同じ原理

イエスの十字架と復活、このイエスの目的によって、我々は「子たる身分」を獲得しました。これは「我々の」とつく何物にもよりません。「神によりて」であります。ルッターは、これを「キリストによりて」と訳しました。

そうですから、我々はキリストの贖い、復活によって養子として誕生したのであります。生まれる、生まれ変わる、ということは、人間の努力や信仰では出来ない。自分で生まれ変わることは不可能です。これは聖霊によります。聖霊によって、神の言葉を信じて救われるということは、全く仏教、浄土門と同じ原理であります。私は東西同じくして、この原理が厳然として歴史に残っていることを誠に不思議に感じます。」

この意味が本当に分かるようになれば、素晴らしいことだと思います。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』12月11日

「ナザレ人イエス・キリストの名によって歩け」

「ナザレ人(びと) イエス・キリストの名によって歩きなさい」(使徒行伝3章6節後半)。この意味は、イエスの名を称えつつあなたの義務を尽くしなさいという意味である。イエス・キリストは、我らに義務を尽くす力も、御名を称える力も下さる。

我らは何と幸いではないか、日々、ナザレ人イエスの名によって歩いているとは。」

新渡戸稲造先生『一日一言』12月4日

「心配の仕溜の役に立たぬことは食い溜と同様なり。食事は腹の空いたところに営むべく、時を計りてあらかじめ注文もできるが、世の中の事は予想通りに起こらぬ、かねての心配は無益となる。ただ平素消化器の健全に注意するは必要。日ごろから判断力を養うて置けば事に当たりて迷わぬ。」

松下幸之助先生『道をひらく』「日本よい国」

「春があって夏があって、秋があって冬があって、日本はよい国である。自然だけではない。風土だけではない。長い歴史に育かれた数多くの精神的遺産がある。その上に、天与のすぐれた国民的素質。勤勉にして誠実な国民性。

日本はよい国である。こんなよい国は、世界にもあまりない。だから、このよい国をさらによくして、みんなが仲良く、身も心も豊かに暮らしたい。

よいものがあっても、そのよさを知らなければ、それは無きに等しい。もう一度この国のよさを見直してみたい。そして、日本人としての誇りを、お互いに持ち直してみたい。考え直してみたい。」

内村鑑三先生『続一日一生』12月10日

「信仰の人は常に休んで常に働く者であります。自分の能力を消費するのでありませんから、少しも疲れません。しかし実際に自分を通して能力が人に臨むのでありますから、自分は働いていると同然であります。これが理想的生涯ではありませんか。「休まずに急がずに」とゲーテの作った有名なる詩にあります。詩人の理想以上の事をクリスチャンは毎日実験しているのであります。信ずれば新たなる能力が加わり、新たなる能力をもって、じっとしていることが出来なくなるのであります。ヨハネ伝7章38節に、イエスが呼ばわりて、「われを信ずる者は、聖書に記ししごとくに、その腹より、生ける水、川の如くに流れ出づべし」と言いたまいたりと書いてありますが、事実はそのとおりであります。ほんとうにキリストを信じて、即ち全身全霊を彼に信（まか）せて、彼は生命の水の貯水池となりて、多くの渴ける靈魂をうるおすのであります。」

バークレー先生「ウィリアム・バークレイの一日一章」（12月25日）

「一つの孤独な生涯

世に知られぬ小さな村に、ユダヤ人を両親として生まれた一人の男がいた。母親は百姓女であった。彼は別の、これまた世に知られぬ小さな村で育っていった。彼は30になるまで大工の小屋で働いていた。それから旅まわりの説教師となって3年をすごした。

一冊の本も書かず、きまった仕事場もなく、自分の家もなかった。家族をもったことはなく、大学に行ったこともなかった。大きな町に足をふみ入れたことがなく、自分の生まれた村から200マイル以上そとに出たことはなかった。偉大な人物にふつうはつきものの眼をみはらせるようなことは何一つやらなかった。人に見せる紹介状なぞなかったから、自分を見てもらうことがただ一つのたよりであった。

はだか一貫、もって生まれた力以外に、この世とのかかわりをもつものはなにもなかった。ほどなく世間は彼に敵対しはじめた。友人たちはみな逃げ去った。その一人は彼を裏切った。彼は敵の手に渡され、まねごとの裁判に引きずり出された。

彼は十字架に釘づけされ、二人の盗人の間に立たされた。彼が死の寸前にあるとき、処刑者たちは、彼が地上で持っていた唯一の財産、即ち彼の上衣を、くじで引いていた。彼が死ぬと、その死体はおろされて、借物の墓に横たえられた。或る友人のせめてものはなむけであった。

長い19の世紀が過ぎ去っていった。今日、彼は人類の中心であり、前進する隊列の先頭に立っている。かつて進軍したすべての軍隊、かつて建設されたすべての海軍、かつて開催されたすべての議会、かつて統治したすべての王たち——これらをことごとく合わせ

て一つにしても、人類の生活に与えた影響力において、あの孤独な生涯にとうてい及びもつかなかった、といっても決して誤りではないだろう。

これはイエスの生涯の誠に美しい描写である。

カウマン先生『山頂を目指して』12月7日

「私たちの生活における不幸は、祝福に変えることができる。心の痛みは、貴重な真珠に変えることができる。

「すべての門は真珠で造られている!」。すべての不幸、すべての失敗、すべての損失は、このように変化させることができる。神はすべての「不幸」を天の賜物に変える力を持っておられるのである。イエスは十字架を、犯罪者の恥辱のしるしから、神の愛のしるしに変えられた。否認するペテロを、恐れを知らぬ岩に変えるためには、しばしば傷を必要とする。「傷がなければ、真珠はない!」——人生の不幸の中から、最も豊かな報酬がもたらされるかもしれないのである。

12月8日(金)、本誌読者の佐藤昭夫さん達と、私の住む港北ニュータウンの中川駅から仲町台駅まで、緑道ハイキングをしました。まだもみじの紅葉が残っており、きれいでした。センター北にある温泉にも入りました。

今年は2月3日に妻の和枝が、天に召され、私は一人で暮らすことになりましたが、今日まで、何とか無事過ごしております。朝晩、京都松栄堂の香りのよい線香を、和枝の写真に向かって立てておりますが、気持ちが落ち着き、写真に向かって、話しかけております。併せて、彼女が尊敬した羽仁もと子先生の本を線香のそばに置き、1、2頁ほど読むことにしております。

新型コロナについては、最近の電車の中とかスーパーでは、まだマスクをされている人が半分ほどおられます。マスク、手洗い、うがいなどは、必要と思われるときは実行されて、十分ご注意ください、コロナにかからないようにして下さいようお祈り申し上げます。

どうぞよいお年をお迎えください。

2023年12月21日

山口周三

エンカウターの読者各位